

Contents

\*\*\*\*\*

特集：再び06年度貿易動向調査から	1p
< 今週の”The Economist”誌から >	
”Gun to the left, guns to the right” 「左右で挟み撃ち」	7p
< From the Editor > 「挑戦者たち」	8p

\*\*\*\*\*

特集：再び06年度貿易動向調査から

「貿易を通して見る日本経済は、エコノミスト主流派の見方とは一味違う」かねてから感じていることですが、06年度の貿易動向見通しをあらためて振り返ると、ここに示されているような日本経済の強さは、十分に認識されていないように思います。

本稿は、今週16日に発売された週刊エコノミスト誌に寄稿したものに、若干加筆したものです。誌面では「日本は世界に冠たる『産業大国』かつ『債権大国』」という仰々しいタイトルがつけましたが、実際、それくらいのことはあるのだと強調しておきたいところです。

2006年度貿易動向調査再び

数の多くない商社系エコノミストの一人として、筆者はささやかな被害者意識を有している。それは「貿易に関するデータって、軽視されているんじゃないか？」という思いである。

株価や為替、金利の上下など、マネーの動きには常に多くの人の目が注がれている。しかしモノの動きを表す貿易は、経済誌でも取り上げられることは少ない。貿易の動きをフォローしているのは、日本銀行国際局やジェトロなど、ごく限られた「身内」だけなんじゃないかと思うことさえある。

しかし、こんな言い方は古くさく聞こえるかもしれないが、日本は今も「貿易立国」である。2002年から始まった今回の景気回復局面も、きっかけはアジア向けを中心とする輸出の増加であった。そして日本が世界に誇れるのは、何はさておいてモノ作りである。その成功度合いは、輸出入という形で見るのが分かりやすい。実際、通関統計や国際収支統計を通して見ると、コンセンサスとは一味違う日本経済の姿が浮かび上がってくる。

商社の団体である日本貿易会では、毎年「貿易動向調査」見通しを公表している。現在14社が調査委員会に参加し、各社が商品別予想を積み上げて作成している。鉱物性燃料は三菱商事、化学製品は三井物産、自動車は豊田通商など、各社が得意分野を分担し、営業現場の声を汲み上げていることが、この調査の「売り」である。

本稿では、筆者が取りまとめの座長を務めた2006年度の見通し（昨年12月5日発表）を資料として、日本の貿易構造に大きな変化が生じていることをご報告したい。なお見通しの全文は、日本貿易会のホームページをご参照願いたい。

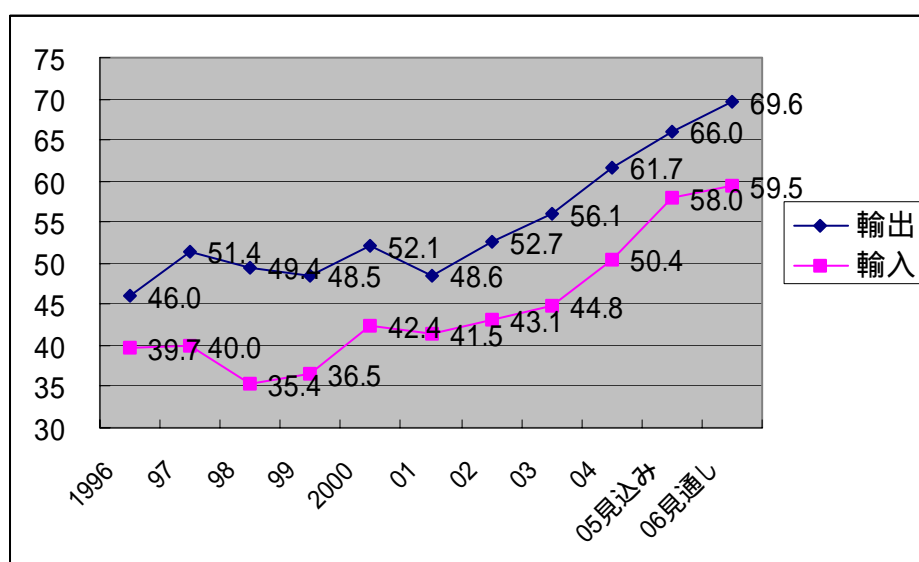
### 輸出：隠れたスターは一般機械

2006年度見通しの第一印象は、輸出入の数字が随分大きくなることだ。通関ベースで行くと、足下の04年度は輸出が61.7兆円、輸入が50.4兆円であるが、これが06年度には輸出が69.6兆円、輸入が59.5兆円に達する。

### ○通関統計 （単位：兆円）

	2004年度（実績）	2005年度（見込み）	2006年度（見通し）
輸出	61.7	66.0	69.6
輸入	50.4	58.0	59.5
貿易収支	11.4	8.0	10.1
（製品輸入比率）	(60.9%)	(57.7%)	(59.4)

### ○通関輸出入の推移 （単位：兆円）



（出典：財務省 / 05～06年は日本貿易会予測）

<sup>1</sup> <http://www.jftc.or.jp/research/index2.html>

90年代における日本の貿易額は、ざっくり輸出が50兆円、輸入は40兆円といったところで安定していたが、それが間もなく70兆円と60兆円になる。今世紀に入ってからの5年間で、輸出入がそれぞれ20兆円ずつも上積みされることになる。

という、「なんだ、中国効果か」と言われるかもしれない。確かに中国向けの伸びは大きいですが、対中貿易の実額は04年度の輸出が8兆円、輸入で10兆円程度に過ぎない。これだけの伸びを、中国だけで説明することは不可能である。世界貿易全体が拡大基調にあることと、機械産業を中心とする日本経済の活況が原因と見ておくべきであろう。

事実、機械機器全体の輸出額は、06年度には54.7兆円に達する見込みである。ここで誰もが思い浮かべる輸出品目は、自動車とエレクトロニクスであろう。確かにこの調査においても、自動車輸出は06年度には実に10兆円の大台を突破する見込みである。

しかし大分類で見た場合、輸送用機器や電気機器以上の花形は一般機械である。06年度、一般機械輸出の伸び率は10.8%と電気機器（6.5%）や輸送用機器（5.1%）を上回り、寄与度でも輸出全体の伸び5.5%のうち2.3%を占める。金額ベースでも、06年度には輸送用機器や電気機器とほぼ同じ15兆円台で肩を並べると予想される。

## ○2006年度主な増減寄与品目

### 輸出5.5%増加

	寄与度	伸び率
一般機械	+2.3%	10.8%
電気機械	+1.4%	6.5%
輸送用機器	+1.2%	5.1%

ひとつには、世界的なエネルギー需要の拡大により、原動機や建設用・鉱山用機械が増加基調にある。また、海外の設備投資が好調であることから、金属加工機械や工作機械の伸びが見込まれる。あまり目立たない存在ではあるが、一般機械は日本の輸出のスターなのである。

考えてみれば、世界中に強豪がひしめき合う自動車やエレクトロニクスに比べ、一般機械は競争もそれほど厳しくない。そのせいか、海外生産比率も10.7%（法人企業統計2003年度）と、輸送機械の32.6%、電気機械の23.4%に比べるとまだまだ低い水準になる。

「目立たないところで強い」一般機械は、日本経済の象徴的な存在といえるだろう。

## 輸入：国際商品価格上昇は頭打ちか

2006年度見通しを見ていて気付く次なるポイントは、輸入の伸びの屈折である。

輸入は04年度12.3%増、05年度15.2%増と2年連続で二ケタ台の伸びを示す。一見「いよいよ日本も、輸入大国への道を歩み始めたか」と思わせるものがある。が、その実態は、国際商品市況の高騰によって水脹れしている面が大きい。

たとえば、「原油及び粗油」の輸入は04年度13.7%増に続き、05年度は47.3%増を見込んでいる。同様に、石炭は57.6%増から33.9%増へ、非鉄金属鉱石は47.7%増から35.0%増と、それぞれ大幅な増加が続く。これらの品目において、量は前年比でほとんど変わっておらず、もっぱら単価の上昇によるものである。また、原料品や鉱物性燃料といった項目が急増することで、04年度には60.9%に達していた製品輸入比率は、05年度には57.7%と6割を割り込む見込みである。

ところが06年度になると、国際商品の価格上昇圧力が剥落する見込みとなる。この調査では、前提条件をやや円高（110円）に置いていることもあって、輸入の06年度伸び率は前年度比2.5%増と伸び悩む。原油及び粗油、石炭、非鉄金属鉱などの品目は、そろって06年度には前年比マイナスに転じる。

商社の営業現場へのヒアリングを通して、「ここ二年ほど続いた資源価格高は峠を越えつつあるのではないか」といった声が多く品の目において寄せられた。現時点では感覚的な意見に過ぎないが、量や金額としてデータが把握できるようになる頃には、大きな変動となっている可能性がある。

ここで気になるのが、昨今の金融政策に関する論議である。超金融緩和政策の転換は今年の大テーマだが、消費者物価上昇率がマイナスからプラスに転じつつあることを前提に議論がされている。確かに労働コストの上昇など、今後の物価上昇を示唆する材料は少なくない。それでも、デフレ脱出を楽観できる状況にあるのかどうか。

現在の消費者物価には、ここ2年間の資源価格高騰による嵩上げ効果が、少なからず含まれているはずである。その効果が剥落し、むしろ下落に向かうとしたらどうなるか。少なくとも今後の輸入物価の動向は、慎重に見ておく必要があるのではなからうか。

## 経常黒字20兆円を生む2つのエンジン

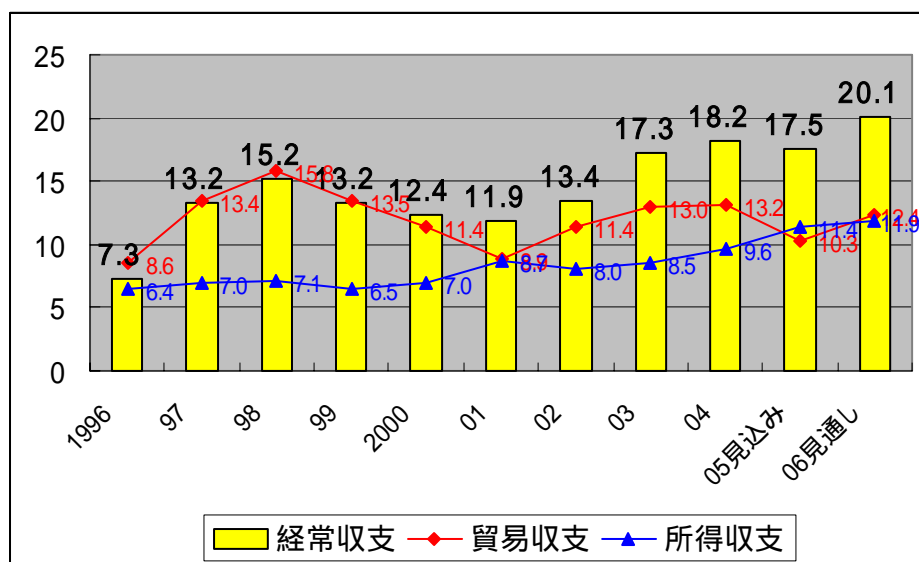
さて、こうして得られた通関貿易収支の予想を、IMFベースの国際収支に落とし込んでみる。

### ○国際収支 （単位：億円）

	2004年度実績	2005年度見込み	2006年度見通し
輸出	588,300	628,980	663,290
輸入	456,729	528,160	539,510
<b>貿易収支</b>	<b>131,571</b>	<b>102,820</b>	<b>123,780</b>
サービス収支	-35,947	-32,260	-32,910
貿易・サービス収支	95,624	70,560	90,870
<b>所得収支</b>	<b>96,441</b>	<b>113,730</b>	<b>119,420</b>
経常移転収支	-9,969	-9,140	-9,520
<b>経常収支</b>	<b>182,096</b>	<b>175,150</b>	<b>200,770</b>

輸出が伸びて輸入が伸び悩む結果、06年度の貿易収支は12兆3780億円の黒字となる。特許等使用料などが減るので、サービス収支の赤字は小幅に留まる。そして所得収支が11兆9420億円と順調な伸びを示すので、すべてを集計した経常収支は、史上初めて20兆円の大台に乗る見込みである。

## ○国際収支の推移



「貿易黒字が20兆円」となれば、対GDP比でも4%程度に達してしまうので、政治的にも少なからぬインパクトがありそうだ。少し前であれば、米国議会で対日非難の大合唱が起きて、円高が一気に加速したとしても不思議ではない。

しかるに20兆円の中身は、以前とは大きく違っている。貿易収支による黒字はその半分に過ぎず、後の半分は所得収支によるものだ。所得収支には、日本企業の海外投資によってもたらされる収益や、外為特会が保有する米国債の利回りなどが含まれる。要するに、過去の海外投資のリターンであり、これが一貫して増え続けている。

いわば20兆円の経常黒字は、引き続き堅調な貿易収支と、雪だるま式に積みあがってきた所得収支というツインエンジンの賜物だ。前者は日本経済がなおも輸出競争力のある「産業大国」であることを示しており、後者は日本経済が「債権大国」の地位を固めつつあることを意味している。

貿易から見えてくる日本経済は、話がうますぎるほどに強靱なのである。

## 日本は産業大国と債権大国のいい所取り

国際収支の発展段階説によれば、経済の発展度合いによって一国の国際収支は以下のように変化する。

1. 未成熟の債務国：産業が未発達な途上国では、貿易収支は赤字となる。そこで海外資本を導入するので債務国となる。
2. 成熟した債務国：輸出産業が発達し、貿易収支が黒字化するが、過去の債務が残っているために所得収支が赤字となり、結果的に経常収支は赤字となる。
3. 債務返済国：貿易収支黒字が拡大し、経常収支が黒字に転換し、対外債務を返済できるようになる。
4. 未成熟な債権国：いよいよ先進国となり、対外債務の返済が進んで債権国となる。所得収支が黒字化する。
5. 成熟した債権国：貿易収支が赤字に転換するが、過去の対外債権からの収入があり、所得収支が黒字のため、経常収支は黒字。
6. 債権取崩国：貿易収支の赤字が拡大し、経常収支が赤字に転落する。対外債権が減少する。

この分類でいくと、日本は4「未成熟な債権国」と5「成熟した債権国」の中間に位置している<sup>2</sup>。普通の先進国は、為替レートの上昇や国内の高コスト化により、競争力を失って貿易収支は赤字となる。いずれは日本も、少子高齢化などの理由で成熟した先進国となり、貿易赤字を所得黒字で埋めることになるのだろう。「日本21世紀ビジョン」においても、2030年度の日本は貿易収支が赤字に転じることになっている。

しかし足下の日本経済は、なおも輸出競争力を維持している。プラザ合意以降の20年で、日本企業がアジアへの製造拠点の再配置を進めると同時に、技術革新によって高付加価値製品の世界で独自の地位を築いてきたからであろう。そして少なくとも商品別に見る限り、**機械機器を中心とする日本のモノ作りの強さに、大きな死角は見当たらない。**

ようやく「長期低迷」を脱しつつある日本経済だが、悲観的な見方はまだまだ多い。例えば財政のプライマリーバランスが均衡するのは、早くとも2010年頃と目されている。その反面、**国際収支から見た日本経済は、産業大国と債権大国の「いいところ取り」**をしており、恵まれたマクロ環境下にあるといえる。

今後の日本の課題は、対外投資の知恵を深めつつ、モノ作りにこだわり続けることであろう。いわば債権国としての「成熟」を先延ばしすることが望まれる。

ともあれ、貿易から見た日本経済の未来は非常に明るいことを強調しておこう。

---

<sup>2</sup> 内閣府の「今週の指標」No.681 = 日本は「国際収支の発展段階説」における「成熟した債権国」への道を歩むのか、でも同様の論考が行われている。<http://www5.cao.go.jp/keizai3/shihyo/2005/1205/681.html>

ここでは未成熟な債権国としてフランスやスイスが挙げられている。また、「2000年以降は輸出も増加傾向にあり、貿易サービス収支の黒字額が下げ止まる傾向にある」ので、「日本が直ちにいわゆる『成熟した債権国』の状態に移行する可能性は高くない」と結論している。

< 今週の”The Economist”誌から >

”Guns to the left, guns to the right”

Lexington

「左右で挟み撃ち」

January 14<sup>th</sup> 2006

\* ”The Economist”誌の米国政治分析コラム。2008年を睨んだヒラリー・クリントンの動向を占っておりますが、民主党内の指名を勝ち取るのは結構、難しいようです。

< 要旨 >

時代が味方している、というのは最高の政治的資産であろう。ジョージ・ブッシュはほとんど必然的に2000年の共和党指名を勝ち取った。クリントン夫人は同様に2008年の民主党指名を得たいと願う。果たしてクリントン王朝は、ブッシュ王朝の向こうを張れるのか？

8年の時を挟んで、両者は驚くほど似ている。選挙資金は充実、党のあらゆる幹部が支持している。が、よくよく見れば相違点もあって、クリントン復興計画は容易ではない。

ヒラリーは予備選にあわせて中道派を装っている。ブッシュもかつては、「温情ある保守主義」などと言ったものだ。ヒラリーは安保タカ派の新民主党員として売り出している。イラク戦争は断乎支持だし、8万人の増派を訴えたこともある。暴力的なテレビゲームを非難し、中絶を「悲劇的な選択」と呼ぶ。かつて蛇蝎のごとく彼女を嫌った共和党員とも協力を惜しまない。外交政策では、もっとも保守的な民主党上院議員のトップ7人に数えられる。

確かに彼女はフェミニストの鑑であり、「右派の陰謀」の犠牲になったという財産がある。それでも民主党の活動家たちはイラク戦争を憎悪しており、それを支持した者とは共に天を抱かずと思っている。また彼女が掌握している伝統的なフェミニストや労組に代わって、ネット左派が力を得ている。彼らはクリントン時代を懐かしんではない。

ヒラリーには、ブッシュが2000年に直面した以上の競争が待ち受けているだろう。彼女がいなくなった左派は、フェインゴールドやエドワーズが占めている。前者はウィスコンシン州選出上院議員であり、イラク戦争には一貫して反対しており、ハワード・ディーンのような旋風を巻き起こす可能性がある。後者は、米国が階級社会に向かっているというテーマを掘り下げており、一度はイラク戦争を支持したことを力強く撤回している。

ヒラリーが右派を完全に掌握できるのならともかく、穏健派民主党員にとってはマーク・ワーナーという理想的な候補者がいる。バージニアという共和党州で成功を収めた知事であり、後継者も民主党とすることができた。彼ならば南部の固い壁を破るチャンスがある。

ヒラリーには知名度が高いという利点があり、クリントン時代への郷愁という強みがある。と同時に、それは不利な点でもある。ヒラリーがホワイトハウスに入れば、夫のクリントンも動き出す。クリントン嫌いの人たちには我慢ならないことだろう。

ヒラリーには金も力もある。中年の民主党支持女性層の支持も期待できる。それでも民主党の指名を確保しているわけではない。とりわけワーナーには十分ご用心を。

## < From the Editor > 挑戦者たち

今週は事件の多い1週間でした。こういうときは、怪情報が飛び交うもので、筆者の下にもいくつもの傑作メールが届きました。以下はその一例です。

### プロジェクトX～挑戦者たち

#### 「ユーザーの挑戦。奇跡の100平米マンション」

そのとき、小島は意外な事を言った。

鉄筋を減らしてみたらどうだろう。

姉齒は戸惑った。

RC造を人体に例えると、コンクリートは肉、鉄筋は骨にあたる。

それを減らそうと言うのだ。

無理です。出来ません。

小島は思わず叫んだ。

俺たちがやらずに誰がやるんだ。俺たちの手で造り上げるんだ。

男の熱い思いに、姉齒は心をうたれた。

技術者の血が騒いだ。

やらせてください。

夜を徹しての設計作業が始まった。

鉄筋を減らし、材料費を削り、耐震性は確保する。

まったく矛盾する作業だった。

技術的に不可能と思われた。

他の設計士にも相談した。

文献も読みあさった。

出てくる答えは一つ、不可能。

しかし、姉齒は思った。

「出来る、いやできると信じなければ出来ない」

姉齒は図面を引いた、繰り返し、繰り返し、、、

一日がすぎ、一週間がすぎ、一ヶ月が過ぎようとしていた。

しかし、図面は上がらなかった。

頭の中には一つの言葉しか出てこなかった「不可能」。

そのとき、姉齒はふと思った。

「不可能なんだ、不可能なことをやろうとしているんだ」。

そこへ木村が現れた。

そしてこうつぶやいた。

「考え方を変えるんだ」

「耐震性を保つと言うことはどういうことか、考え方の根本を変えるんだ」

姉齒には理解が出来なかった。

木村はこう続けた。

「耐震性があるということは、実際の地震で建物が倒れる危険性が無いということだろうか？ いや、設計士にとって、耐震性があるということは、建築確認で耐震性があると認められることなのではないか」。

暗闇に光がさした気がした。

姉齒は、また机に向かった。

小嶋は、確認申請を提出した。

書類を検査したのはイーホームズだった。

自信があった。

「必ず通る、いや通して見せる」

そして、運命の日。

「建築確認許可」

不可能だと思われていた。

いや誰もが不可能だと信じて疑わなかった。

しかし、それが可能になった瞬間だった。

姉齒、小嶋、木村、内河

朝まで飲み明かした。

内河が言った。

「よし、どんどん行くぞ」

小嶋が言った。

「ヒューザースタンドの確立だ」

木村が言った。

「熊本から世界へ」

姉齒は、充足感に包まれ、ただ涙を流していた。

耳元で中島みゆきの歌声が鳴り響いてしまうのは、筆者だけでしょうか？

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒107-0052 東京都港区赤坂2-14-27 <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954

E-MAIL: [yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com)